

論説

中華民国の台湾化にみる金門の位置づけに関する一考察

上水流 久彦

はじめに

金門県（以下、金門）は台湾島から約 270 キロ離れた、福建省アモイの沖にある金門島とその西側にある烈嶼（小金門）等の島々からなる。人口は戸籍上約 10 万人いるが、戸籍を移さず台湾島で働く者も多い¹。中国大陸のアモイからは近いところで約 2 キロのところであり、第二次世界大戦後の中華人民共和国政府と中華民国政府の戦い（実質的には中国人民解放軍と中華民国軍との戦闘）では、その最前線となった²。1956 年には軍政が敷かれ、島全体の軍事化がすすめられた³。多い時には 10 万人以上の軍人が駐留した。重要な軍事拠点であったため、1992 年に戒厳令が解除されるまで台湾島と金門の自由な往来はできなかった。

中華民国統治地域（台湾島と澎湖諸島を含むその周辺の島々、並びに金門県と連江県）と中華人民共和国統治地域（以下、中国）は長年直接的に往来できなかったが、2001 年に金門とアモイの間だけは直接行き来ができるようになった。これを「小三通」⁴という。金門は中国との敵対の最前線から、中国との交流・交易を行う最前線へと変わった。現在、金門に駐留する軍人は約 3000 人で、軍人に依存してきた経済構造を転換する必要が生まれた。結果、金門の観光地化が進められ、台湾島や中国から多くの観光客が訪れ、最近では世界各地の華僑が来ている⁵。

ところで、近年台湾では本土化が進む中で、中華民国＝台湾社会（台湾島を中心とした国家認識に基づく社会）という認識も広がりつつ（台湾化）ある。これは、中華民国の国体として憲法上領土が中国全土に及ぶこととは異なり、現在、福建省である金門を中華民国＝台湾社会においてどのように位

置づけるか、様々な意見が生まれるようになった。一つの極には福建省の金門の存在は台湾省以外を統治しているという点で中華民国には重要であるという理解と、もう一つの極には金門は逆に台湾アイデンティティに基づく国家には不要という理解とがある。そこで本稿では、金門の特殊な歴史を踏まえたうえで、台湾社会における金門の位置づけを明確にし、今後の金門研究の課題を明確にする。

本土化とは、1990年代最初まで中国全土を含む中華民国という体制に基づき政治、教育、文化等を形作ってきた国家の在り方を、実際の統治地域にあわせてそれらの制度を作り替えていく動きである。その結果、政治では中国国民党（以下、国民党）が中華民国統治地域に敗走してくる以前に選んだ立法委員（日本の国会議員に相当）を辞めさせ、中華民国統治地域から選出された立法委員へとその構成を変えた。文化的にも自らの文化への重視が進み、「国語」である中国語以外に母語教育の推進や自らが住む地域の郷土文化の見直しが進んだ。歴史についても中国大陸を中心とした歴史のみならず、台湾または自らが居住する郷土の歴史を学ぶことが開始された。

本土化は中華民国統治地域で進められており、金門もその中にある。だが、台湾での本土化は、台湾島に住む漢人、なかでも福建から台湾に移民してきた人々を祖先に持つ閩南人を中心とした中華民国体制の見直しという意味合いを実際には強く持つ。その重要な動きが台湾独立であり、「中華」という名称を「台湾」という名称に変えていく「正名（名を正す）運動」である⁶。本稿では、このような動きを本土化とは区別して「台湾化」としたい。中華民国という国家が台湾社会と均しくなる変化である。

本土化は金門の中華民国福建省としてのアイデンティティを尊重し、郷土教育を推進し、金門県選出の国会議員を選ぶことを可能としているように、台湾島の価値観を押し付けるものではなく、政治的権利も保証されている。それに対し、台湾化は台湾島を中心として形成された価値観（例えば、中華民国という名前を捨てる、台湾島の経験を主として歴史を語る等）に染まることや、金門を台湾島の価値観や歴史の延長でとらえることを意味している。時に金門不要論にもつながる。本土化は蔣経国総統時代（1978～1988）末期から進む現象だが、台湾化は直接選挙で大統領⁷に選ばれた李登輝大統領時代

(1996～2000)、そして陳水扁大統領時代(2000～2008)に特に進んでいく。

この中華民国の台湾化が進む中の金門研究の課題とは、結論を先述すれば、①中華民国の台湾化における金門の政治的重要性の矛盾(金門を中華民国の国体を保つための重要な場とみなすか、中華民国＝台湾社会の究極の形として切り捨てるか)、②金門アイデンティティにおける世代間の分裂(中華民国にアイデンティファイするか、台湾社会にするかに関する世代差)、③台湾社会の歴史認識における金門の存在価値の希薄化(中華民国という国体を守るために果たした金門の歴史と存在価値に対する台湾社会における無関心化)、である。本稿では、金門在住の人々、台湾島に住む金門人学生、台湾島の台湾人、さらには独立運動家、統一支持者らのインタビュー、さらには金門と台北の文化財の比較等を通じて台湾島の人々の金門へのまなざしと金門の人々の自己認識を示し、課題を明らかにする⁸。

1. 中華民国における金門の特殊性

本節では中華民国統治地域において、金門が如何なる特殊性を持つのかを明らかにしたい。その考察にあたって 2011 年に金門研究の特集を行った川島の指摘を最初に引用する。川島はその特集にあたって、「1980 年代から 90 年代にかけての民主化の過程で、台湾の人々が台湾や台湾人を研究し、アイデンティティを確認していったように、昨今の金門島では金門の人々によって金門が研究され、アイデンティティの再形成がなされている」と述べる(川島 2011: 7)。と同時に続けて「このような動きを中華民国の統治下における金門県としての「郷土の再発見」だと見なすこともできるだろう。しかし、台湾との深い関係を意識しながらも、金門学が想定している対象は、台湾の一部としての金門では必ずしもない。それは、金門をひとつの地域と見なし、…」とも語る(川島 2011: 7)。

中華民国統治地域では既述したように 1980 年代以降民主化が進み、1990 年代初めから本土化が広がった。その中で台湾島の人々の多くは中華民国国民としてではなく、自ら住む台湾島の人間として自らのアイデンティティを問い直していくこととなった。それは金門も同様である。金門のアイデンティティの再形成という最近の動きも自分たちの文化の見直し、すなわち「郷

土の再発見」と捉えることもできよう。この点で川島の理解に筆者も賛同する。

だが、それ以上に重要な点は、川島が指摘するように「台湾の一部としての金門では必ずしもない」という点である。川島は「台湾」という言葉が持つ意味を明確にはしていないものの、台湾が台湾島と、澎湖諸島を含むその周辺の島々だとするならば、中華民国の本土化、その先にある台湾化が持つ意味は、台湾島と金門では異なる。

行政上の単位として見れば、金門は福建省（中華民国では「省」は行政上実質的に機能していない⁹⁾）に属する。台湾省の一部ではない。それだけに金門の人々は、台湾島を中心とする台湾化に対して、後述するように台湾島の住人のようにアイデンティファイできるものではない。「中華」にアイデンティファイできて、「台湾」にはできない現状が金門にはある。したがって、「台湾との深い関係を意識しながらも……台湾の一部としての金門」と理解することはできず、台湾島とは別個の「ひとつの地域」としてみなす必要性がそこに出てくる。

中華民国統治地域における金門の特殊性は、日本の植民地支配との関係からも見えてくる。植民地主義の研究において台湾社会は、二重の植民地支配を受けた、もしくは脱植民地主義の過程を外来政権に行われた場として、アフリカや東南アジアの旧植民地とは異なる課題が現在指摘されている（三尾2016）。三尾は、台湾島と澎湖諸島を含むその周辺の島々と、パラオやヤップ等の旧南洋群島の植民地支配に関わる特色として、日本の植民地支配の後にさらに違う外来政権によって統治されたことを指摘する。台湾島と澎湖諸島を含むその周辺の島々であれば、日本の後に来た統治者は中国大陆から敗走してきた国民党であり、旧南洋群島ではアメリカであった。西洋列強の植民地が、その支配に抵抗し、独立を勝ち得たことも、また韓国のように日本の植民地支配終了後自らの手で脱植民地化を行ったことも異なる歴史が、台湾島と澎湖諸島を含むその周辺の島々と旧南洋群島にあるという¹⁰⁾。

台湾島と澎湖諸島を含むその周辺の島々の二重の植民地支配、また日本支配からの脱植民地化が当事者ではなく国民党に代行されたことは、1945年までに当該地域に移り住んだ漢人、または彼らを祖先に持つ「本省人」にと

って、彼ら自身のアイデンティティや中華民国への感情、国家の在り方を考えるうえで重要な意味を持ってきた。戦後直後中華民国統治地域は、国民党とともに当該地域に来た「外省人」が政治の中枢を握り、本省人は日本の植民地支配を受けたため、「奴隷根性」があるとして差別された。祖国復帰を歓迎した本省人は、外省人の彼らへの差別的態度、偏った政治的登用、賄賂の横行から中華民国政府、国民党、外省人へ失望と反発を覚えるようになった。

その亀裂は、二・二八事件によって決定的なものとなった。二・二八事件とは、1947年2月に発生した本省人による外省人統治への抵抗運動に対する国民党による弾圧である。1949年からは約50年間、台湾では戒厳令が敷かれ、独裁政治が行われた。その間、国民党による本省人への弾圧は続いた。本省人は、日本統治が終わって外省人や国民党の統治が始まったことを称して、「犬が去って豚が来た（日本は門番ぐらいの役には立ったが、外省人や国民党は食べるだけで何も役に立たない）」と語るようになった。

二重の植民地支配を受けたとする立場から台湾島と澎湖諸島を含むその周辺の島々の戦後を考察する黄智慧は、「戦後」の台北が「戦勝国首都」と「敗戦国植民都市」の2つの風景を持ったと捉える。そして、前者の顔が後者の顔を覆うひとつの出来事として、「終戦」と「光復」¹¹の問題を挙げている。「もっとも大きな象徴としての時間、すなわち8月15日という敗戦、或いは終戦の日は、台湾ではあたかも何もなかったかのように、平常な一日としてみなされている。しかし10月25日の国民党が接収して入ってきた日は、『光復節』という、国定祝日となり、国家や地方政府で大きな記念行事や祝賀の催しが開かれる。こうした記憶装置としての空間や時間が塗り替えられたことに対し、その激動の時代を歩んだ人々にとって、頭から記憶が抹消される筈はなかった」と黄は述べる（黄智慧 2003: 123）。そして、戦前日本語を積極的に話さなかった台湾の人々が戦後積極的に日本語を話すようになった現象を指摘する（黄智慧 2003）。

国民党による台湾島と澎湖諸島を含むその周辺の島々の統治は、為政者への反発を本省人に惹起し、日本への複雑な感情を生むこととなった¹²。敗戦国としての記憶を持つ本省人と、帝国日本に勝利した記憶を持つ外省人の二つの歴史記憶主体の発生は、その後の台湾島と澎湖諸島を含むその周辺の島々

の在り方、日本への感情に大きな影響を与えた（上水流 2016）。本省人の反発は、国民党と対峙する民主進歩党（以下、民進党）への支持、ひいては中華民国の否定と台湾独立へとつながっていた。日本と国民党の二重の支配は、現在の中華民国統治地域の本土化や台湾化を生み出す重要な要因であった。

しかしながら、金門は戦時中に日本に8年間占領された経験はあるものの、台湾島のように日本の植民地支配を受けたことはない。したがって、台湾島のように脱植民地化を国民党によって代替されたという認識も存在しない。すなわち、国家として二重の植民地支配を受けた台湾島とは歴史的に全く異なる経緯で、金門は中華民国の統治を受けてきた。中華民国統治地域でこのような場所は、金門を除いて福建省の福州から約30キロ離れたところに位置する連江県のみである。ここからも、「台湾との深い関係を意識しながらも、金門学が想定している対象は、台湾の一部としての金門では必ずしもない。それは、金門をひとつの地域と見なし…」という理解にいたる。

福建省としての金門、日本植民地統治を受けていない金門という中華民国統治地域の中における二つの特殊性は、近年の中華民国の台湾化によって一層、金門を国家体制においてアンビバレントな立場へと追いやっている。そこで次節では、人々の意識における中華民国の台湾化の視点から金門の国家体制における位置づけを考察してみたい。

2. 中華民国の台湾化にみる台湾島の金門認識

中華民国の台湾化は、台湾以外の中華民国の領土に愛着を感じる中華民国国民にとって許しがたい重大な問題である。例えば、韓国には中華民国籍を持つ華僑（以下、韓国華僑）が約2万人いるとされるが、彼らが台湾島しかほぼ統治していない中華民国に帰属意識を持つのは、憲法上中華民国が中国全土を統治するとしているからである。韓国華僑の多くは山東省の出身だが、憲法上山東省は中華民国の領土である故に中華民国に帰属意識を見出し、中華民国という体制を支持する。したがって、李登輝が主張した「中華民国在台湾（中華民国は台湾にあり）」や「中華民国不存在（中華民国は存在しない）」には反発を強く覚える。ましてや台湾独立となると、彼らが台湾島にある中

華民国政府を支持する理由は全くなくなる（上水流・中村 2007）。

「華民国在台湾」等の発言は李登輝らの政治家による、もしくは独立運動家による意図的な発言である。だが、華民国の台湾化は無意識に若い層に浸透しており、国家の在り方を考えるうえで一層重要な現象となっている。そこで若年層の国家意識を示す事例をひとつあげたい。

2012年の西暦1月1日、華民国では建国100周年を迎えた。筆者も大統領府前に午前中に出かけたところ、高齢の男性と男子大学生が口論している場面に出くわした。話を聞いていると、男子学生が所属する学科で作成し、彼が持っている建国百周年の祝賀のボードの内容が間違っていると高齢の男性が咎め、男子大学生が「そんなことはない」と応答していた。高齢者の男性は中国語の発音から推測するに外省人であった。

問題のボードには「慶祝台湾建国一百周年」とあった。高齢者の男性が咎めるのも無理はない。百年前の1912年、台湾は日本の植民地であった。したがって、台湾建国一百周年はあり得ない。そこは華民国建国一百周年でなければならない。

だが、その口論を見る限り、男子学生にとって「華民国」も「台湾」も同じという認識であった。そのボードが学科で作成されたことに鑑みれば、作成に関わった学科の学生は誰もその点に疑問を覚えていないと推察される。

実際、筆者も自身が知り合いの複数の大学生に話を聞くと「華民国＝台湾」ということに何ら疑問を持っていなかった。筆者が、「では、金門や連江はどうなるのか」と尋ねると、誰もが驚いた顔をして、「考えていなかった」、「あそこも台湾みたいなもの」、「大陸¹³にあげればいい」等と答えた。いずれにしても、金門の存在は彼らの中で忘れられている。

違う場面で台湾について議論をしている時に、ある台湾の女子大学生は、躊躇なく「金門は台湾ですよ」。「台湾と変わったところはありません、同じです。同級生に金門の人がいるが、自分たちと同じですよ」と話をした。「華民国と台湾は同じですか」と筆者が質問すると、「華民国は大陸も含んでいますので、台湾とは確かに違います」と説明した。でも「金門は福建省でしょう？」とさらに尋ねると、「もう台湾ですから」と答えた。

これらの会話からは、台湾という用語が華民国統治地域を指す場合と、

中華民国と対比的にその一部分（台湾島と澎湖諸島等の周辺の島々）であるという場合の二通りがある。だが、そのような違いが意識されて語られているというよりは、むしろ自然に「金門は台湾（台湾社会）だ」と理解していると見なすほうが妥当であろう。

なお、彼女らの金門認識だが、そこに居合わせた3名の女子学生は、金門には行ったことはないということであった。さらに金門について尋ねると、「戦争。戦争の古蹟がたくさんあるところです」と話した。ただ、「823砲戦¹⁴はいつでしたかね」という筆者の質問に答えることはできなかった。

台湾に住む本省人の50歳代や60歳代は若年層と異なった意識を持っている。筆者は2010年頃から外省人の国家アイデンティティについて調査を開始したが¹⁵、その当初「外省人を紹介して欲しい」と当時50歳代の知人に頼んだところ、金門の人を紹介された。彼によれば、「金門は福建省でしょう。台湾ではないですからね」と答えた。すなわち、台湾社会とは別の存在として金門は認識されていた。また別の知人（60歳代）は、金門は国民党がずっと強く、「あそこは中国ですから」と答えた。その意味を確認すると、「彼らには台湾人意識がない」ということであった。

台湾独立運動を長年続けてきた70歳代男性は、金門を上記とは違った形で認識している。台湾が独立をする場合、その範囲はどこかと尋ねると、台湾島と澎湖諸島等の周辺の島々だという。「ならば、金門や連江は入らないのですか」と筆者が重ねて聞くと、「入りません」と断言した。その後続けて、「金門と連江は中国にあげてもいいですし、彼らが台湾と一緒に独立したいというなら入れてもいいです。住民投票をして決めてもらえればいい。でも国民党が強くて、あそこは統一派ですからね」と述べた。彼の発言からは、台湾島と金門を運命共同体と考えていないだけでなく、台湾社会と距離をとるような形で金門を捉えていることがわかる。

ここまで紹介してきた台湾社会の人々の話をまとめると、中華民国の台湾化には次のような認識を見ることができる。ひとつは中華民国と台湾社会が同等となり、その台湾社会に金門もその歴史性等が考慮されることなく含まれるというものである。主に若年層にこのような傾向が見られる。

もうひとつは、中華民国の台湾化は、中華民国と台湾社会とは別の存在で

あり、中華民国という国体を脱ぎ捨てるというものである。そこではひとつめの事例とは逆に金門は台湾社会とは異なるものと認識され、かつ新たな国体において極端な場合、金門は必要としないとなる。後者では金門の持つ政治性が、その排除の要因になっていた。したがって、中華民国の台湾化は、特殊性を無視した包摂と特殊性による排除を台湾社会では招いていると言える。

なお、台湾社会の少数派である中国との統一を希望するインフォーマントと金門について議論をしたことがある。大半が当然ながらいずれの形でも中華民国の台湾化には反対であり、金門を台湾独立において排除する話や台湾と金門を同一視する姿勢については強い疑問を覚えていた。金門は台湾社会と違い、福建省だという認識である。金門の排除について「馬鹿だ」と強く否定する者もいた¹⁶。

しかしながら一人だけは、「金門は台湾（台湾社会）だ」と断言する者（外省人）もいた。統一を支持する人の中にもそのような考えがあることは、彼の思想上の矛盾だが、中華民国の台湾化の広がりや深さの証左と言える。

3. 中華民国の台湾化にみる金門人アイデンティティ

では、中華民国の台湾化において金門の人々は、金門や台湾化についてどのような認識を持っているのだろうか。金門研究を長年行っているマイケル・スズーニは、金門の軍事化とその記憶を論じる論稿の中で、金門の人々の矛盾した記憶の在り方を指摘する。ひとつは、被害者意識で「当時、民兵の役務は強制的であり、我々はいかなる権利も利益もなく、…働けと言われれば働き、何かをしると言われればしなければならなかった。躊躇することは許されず、さもないと軍事法廷で罰せられた」という記憶である（マイケル・スズーニ 2011：78）。金門の軍事化によって自らの生活は破壊され、権利は踏みにじられたとする。

一方で、金門の主體的記憶というものがあると述べる。例えば、「過去、我々は金門で台湾が民主化できるように努力し、台湾の経済発展に間接的に貢献した」や「金門の軍事的奇跡がなければ台湾の経済的奇跡はなかった」、「我々の犠牲によって台湾が今日も存続しているという事実があるのみだ」等の言

説である（マイケル・スズーニ 2011：78-80）。すなわち、現在の台湾社会があるのは金門（の人々）のおかげだという認識である。

筆者が知る限り、台湾島において今日の台湾の繁栄を金門の犠牲から語る者はいない。823砲戦等の戦闘で負けなかったことによって現在の中華民国の体制が維持されていることは、台湾島の中年以降の人々の多くが認識している。

だが、それは金門の犠牲によってではなく、金門という中国との戦いの最前線で戦った台湾の人々、軍人となった彼らによってであるとされていた。823砲戦を経験した人々の集まりは台湾島各地で実際見ることができ、その戦闘を戦い抜いたことに本省人であれ外省人であれ強い誇りを持っている。

金門は軍事基地として厳しい状況にあったが、台湾島も中華民国政府による戒厳令が敷かれており、人権が尊重されない状況にあったと考えている台湾島の人々がほとんどである。軍事化されたのは台湾島も金門も同じであり、戒厳令を生きた彼らにとって、「金門の犠牲」は不可視化され、現代の若者が823砲戦の歴史を詳しく知らないように忘却される。

さて、金門の人々から筆者の調査において多く聞いた話は、スズーニが指摘する戦地であったことに加え、世界で中華文明を最も保持している金門という認識であった。なお、金門の人々の調査状況だが、話を聞いた関係者は76頁からの表1にあるように33名である。金門在住が28名で、そのうち2名が金門県出身ではない。5名は台北市、その周囲にある新北市に住む大学生等である¹⁷。以下、40歳代以上を中心に（1）金門への認識、（2）中国（大陸）への認識、（3）台湾化への認識、（4）若者世代の認識について述べる。

（1）金門への認識

中華文明を保持している金門ということについて、ある寺廟（古蹟）の管理員である男性（Z氏）は、「台湾は西洋化されすぎており、また中国は中国共産党（以下、共産党）によって支配され伝統文化が破壊された。したがって、古い中華文明が残っているのは金門だけだ」と語ってくれた。例えば、その「見証（目に見える証）」として紹介されるものが、金門の古蹟である。すべての金門調査でタクシーの運転手をつとめたO氏もこの点には同意し、金門大学の教員（I氏、J氏）も地元の間人がそのように考えることに違和感

を覚えてはいなかった。

金門の文化に詳しい黄振良が 2008 年に出版した『金門古蹟導覽』によると、43 の古蹟が金門にはある。そのうち、宋代の物が 1、明代の物が 12、清代の物が 26、中華民国時代が 4 つである（黄振良 2008）。2004 年のデータであるが、台北市の古蹟の約 8 割が日本統治時代のものであること（上水流 2007 : 93）と比べると、その違いは歴然としている。中華文明の伝統が最も残っていると金門の人々が語ることも理解できる¹⁸。公共交通機関（タクシーも含む）で行くことができない離島にある古蹟を除き、42 の古蹟すべてを筆者はまわったが、古蹟居住者・説明者（M 氏、Q 氏、R 氏、S 氏、W 氏、Y 氏）や同行者（O 氏、AA 氏）は、具体的な言い方は違うものの清代の古蹟は金門では珍しくなく、宋代、明代の歴史を見ることができると誇らしげに実際話ってくれた。

中華文明が残る金門という認識は、彼らが自らの文化を説明する時にも垣間見えた。筆者が金門の文化施設等を訪れて説明を受けるときに、彼ら（K 氏、Q 氏、W 氏、Y 氏、Z 氏）が「この中国文化は…」、「私たち中国人にとって…」という語りを何の躊躇もなく行うからである。「金門の文化は台湾と違って…」というフレーズもしばしば聞いた。「台湾人は…」、「台湾の文化は…」という言い回しに台湾島で聞きなれていた筆者は、金門でのそのような発言を聞いて驚いた。同じ中華民国とは言え、台湾島とは異なる自己認識が金門には存在するのだと理解した¹⁹。

金門の調査では、台湾島で暮らし戻ってきた人々からも話を聞くことがあった。その時にしばしば取り上げられるのが、「歩調」であった。「台湾と金門とでは歩調が異なる」という。台湾島は歩調が早く、金門ではもっとゆっくりだと語る。歩くスピードとは語るが、ようは生活のリズムが異なるという意味である。金門中心部の観光施設の近くで屋台を開いている L 氏は、そのため「台湾の生活にはなれず、金門に戻ってきた。そしてこの商売をしている」と語ってくれた。L 氏以外の P 氏、V 氏、O 氏からも金門でこのような話を聞いた。

No.	氏名（仮名）	職業等	年齢	性別	備考
1	A氏	県庁職員	40歳代	女性	文化政策担当
2	B氏	元小学校校長	70歳代	男性	県庁文化政策関係者
3	C氏	元小学校校長	70歳代	男性	県庁文化政策関係者
4	D氏	著述家	60歳代	男性	県庁文化政策関係者
5	E氏	小学校校長	60歳代	男性	A氏紹介
6	F氏	小学校校長	60歳代	男性	A氏紹介
7	G氏	高校教員	50歳代	男性	A氏紹介
8	H氏	文化工作者	50歳代	男性	A氏紹介
9	I氏	大学教員	30歳代	女性	金門県以外出身者
10	J氏	大学教員	30歳代	女性	金門県以外出身者
11	K氏	古蹟説明員	40歳代	女性	
12	L氏	飲食業	40歳代	男性	
13	M氏	古蹟居住者	50歳代	男性	
14	N氏	古蹟居住者	70歳代	女性	M氏の母親。M氏同意見
15	O氏	タクシー運転手	50歳代	男性	3年間毎回金門を案内
16	P氏	県庁職員	20歳代	女性	知人の教え子
17	Q氏	古蹟説明者	40歳代	男性	
18	R氏	古蹟居住者	40歳代	女性	
19	S氏	古蹟居住者	50歳代	男性	民宿経営
20	T氏	古蹟居住者	70歳代	女性	S氏の母親。S氏と同意見
21	U氏	飲食業	40歳代	女性	
22	V氏	飲食業	20歳代	女性	
23	W氏	古蹟説明者	40歳代	男性	
24	X氏	古蹟居住者	50歳代	男性	
25	Y氏	古蹟管理者	50歳代	男性	

26	Z 氏	古蹟管理者	60 歳代	男性	
27	AA 氏	タクシー運転手	40 歳代	女性	小金門案内
28	BB 氏	観光業	40 歳代	女性	
29	CC 氏	大学生	20 歳代	男性	台北市在住・知人の教え子
30	DD 氏	大学事務	20 歳代	女性	台北市在住・知人の教え子
31	EE 氏	大学生	20 歳代	女性	台北市在住・知人の教え子
32	FF 氏	大学生	20 歳代	男性	新北市在住・知人の教え子
33	GG 氏	大学生	20 歳代	男性	新北市在住・知人の教え子

表 1 金門調査におけるインタビュー対象者

(2) 中国（大陸）への認識

台湾島との違いを感じさせる他の要因は、アモイとの結びつきである。アモイまでは船で近いところなら約 30 分で行くことができる。スズーニは、2002 年に「小三通」が可能となって以降の結びつきの強さについて次のように記す。

「現地の人々は消息が途絶えた親族と再び連絡を取った²⁰。金門に駐留した台湾の軍人は中国大陸へ渡り、沿海の貧しい漁村から、若い花嫁を娶った。財力のある金門住民は中国大陸への投資を開始し、多くの人々がアモイの不動産を購入した。今日の金門においてよく聞かれる冗談として、年配者が現地の方言で行う挨拶はもはや「ご飯を食べましたか」ではなく、「最近アモイへ行きましたか」というものになっているという」（マイケル・スズーニ 2011:78）

筆者もアモイに買い物にしばしば行く、アモイも台北に劣らず都会で何でもある、マンションをアモイに買って金門とアモイを頻繁に往来している、家族がアモイに住みビジネスをしている等（C氏、E氏、U氏、O氏、X氏、AA氏）を聞いた²¹。金門大学教員の2名からもそのような金門の人々の実態を確認できた。既述した台湾島から戻り屋台を開いているL氏もビジネスを広げるなら台湾ではなくアモイで商売したいと語っていた。アモイの雰囲気が好きだという。これらの話から、中国本土との一体化した生活圏の形成が浮かび上がってくる。

筆者が調査した2012年から2014年の中華民国は、中国との良好な関係を模索する馬英九の時代であった。だが、それでもなお中国とどのような関係を構築するか、距離を保つかということが政界やメディアのみならず、知人の間でも議論されていた時代であった。そのような時に日常的にアモイとの間を往来し、ビジネスと買い物を行っている金門の生活は、中国との直行便開設によって中国で商売を行う「台商」が台湾島にも多かったとはいえ、台湾島の感覚とは全く異なるものであった。

大陸への認識が台湾島と異なることをさらに痛感したことは、世界遺産申請の話である。長年、金門の小学校で校長をつとめ、金門県の文化行政にも強い影響力を持つ前校長B氏は、金門の古蹟や歴史建築²²等を世界遺産に登録したいと2013年の調査の時に語った。

だが、中国の「一つの中国」の方針のもと、中華民国は国際的組織、例えば国連やWTO、WHOに加盟することはできず、世界遺産の認定組織であるユネスコにも当然加盟できていない。したがって、中華民国から世界遺産の申請はできず、現在まで世界遺産に登録されたものはない。

そこで筆者がこの状況を説明し、どうやって登録するのですかと尋ねたところ、B氏は「中華民国がユネスコに加盟していないことは知っている。だから台湾の政府ではできない。そこで共産党から申請してもらおうのだ」と答えた。そして、その構想については、「金門のみではなく、対岸にあるアモイやその周辺にある文化遺産と一緒に閩南文化の遺産として世界遺産に登録するのだ。だから中国から申請してもらえばよい」と語った。筆者が「そんなことを中華民国政府が認めますかね」と質問すると、「そんなことは関係ない。

認めるも認めないも中国政府が申請したらそれでおしまいでしょう。台湾政府は何もできないでしょ」と語った。

この話は B 氏の個人的アイデアに過ぎないと思っていたが、金門県政府（金門県庁）の文化局担当者 A 氏に確認すると実際に金門県政府としてそのような構想を持っていると語ってくれた。金門県政府の広報誌にも前校長が語った形での世界遺産登録が紹介されていた。台湾島で調査をしている限り全く思いつかない発想で、金門と中国とを一体的に考える彼らの認識の強さに衝撃を受けた²³。

(3) 台湾化への認識

B 氏の台湾化への認識だが、中国と台湾を切り離して考えることに全く同意していなかった。したがって、李登輝元大統領や陳水扁元大統領については強い反発を覚えていた。最も許せない政治家はこの二人であった。彼は馬英九政権時代に教育的貢献から表彰を受けるが、その功績をたたえる自費出版の書籍には李登輝や陳水扁と一緒に移った写真は一枚も掲載されていなかった。意図的に外していた。彼は、中華民国の台湾化については大反対であり、中華民族としての意識を若い人に植えつける教育がとても重要だと考えていた。「自分は当然、台湾人ではない」と断言した。

このような考えはこの世代には特異なことではない。同世代もしくはやや若い小学校の校長（C 氏、E 氏、F 氏、G 氏）や文化人（D 氏、H 氏）に話を聞くことができたが、自らは台湾人ではないし、中華民国の台湾化には反対であり、台湾化は金門を現在の中華民国から切り離すものだととらえていた。中華民国を分断するものだという²⁴。

(4) 若者世代の認識

ただ、若い世代になると金門について意識が異なる。台北の大学を卒業後県政府で働いている P 氏は、若い人は自分たちも「台湾人」だと思っていると答えた。前校長のような認識は中年以上の人たちの考えとしてあることは間違いないが、自分たちとは違うと述べた。筆者が「自分たち」というのはと聞くと、「自分と同じ世代」と答えた。中華民国と台湾社会の政治的意味合い上の違いは難しい、理屈としては違うが感覚的には同じようなものだという。

このような感覚は、現在台湾島で暮らしている金門出身の大学生にも共通していた²⁵。新北市にある大学に通う男子学生 FF 氏は、中華民国と台湾社会との違いをあまり考えたことはないと述べる。そして、金門が福建省で台湾島²⁶と違うと思ったことはないと述べる。実際に台湾島で暮らしてみて、金門と違うと思ったことはないと語る。その理由として、インターネットや SNS が発展し、テレビも台湾島と同じモノを見ることができ、何か違いを感じることはないという。筆者が、台湾独立派の人間の中には、台湾独立において金門は別に一緒になくても良いという考えがあるが、どう思うかと聞いたところ、驚いた様子で「よくわかりません」と答えた。将来は台湾島に残って芸術関係の仕事がしたいと考えており、金門に戻る気はないとのことであった。

台北市内の大学に通う男子学生 CC 氏は、金門出身ということで、台湾で暮らして何か困ることはありましたかと聞くと、「たまに金門出身ということで驚かれることがある」、「なんとなく田舎者とみられている感じがすることもあった」と述べた。また、台北に住み始めた当初「確かに歩調が異なる」と感じたとはいう。

だが、基本的に台北の暮らしに満足しており、楽しいということだった。金門人を台湾人ではない外省人と位置付けることについては、「それはそのとおりに」というものの、自分を福建人と考えたことはないと述べた。台湾人であると考えていて、それで周囲の学生とあつれきを生んだことはないという。金門に住む中年以上の金門認識は理解できるが、自分たちの世代では変わってきているとも語った。台湾独立とかは考えたことはないが、観光で訪れる中国人と自分たちは違うともとらえていた。大学卒業後は、金門に戻りたいということであった。台湾島の暮らしに違和感がなく、台湾社会として金門を感覚的にみなすことには、他の大学生 2 名 (EE 氏、GG 氏) と 20 歳代の女性 (DD 氏) にもみられた。金門出身者の若年層のこのような認識は、筆者に彼らを紹介した大学教員も納得するものであった。両者ともに併せて「若者は変わってきている」という意味合いのことを述べた²⁷。

若年層の話からは、台湾島の若年層と国家認識が同じであることがうかがえる。福建省金門という認識はなく、ゆるやかに「台湾 (台湾社会)」だと考

えている。中華民国と台湾社会の関係も厳密に区別してはいなかった。これらの筆者の調査に基づけば、40歳代より上と20歳代では国家認識について違いが存在していると言えよう。

おわりに

本稿の最後にこれまでの資料に基づいて、中華民国という台湾において金門の社会的研究課題とは何であるかについてまとめたい。冒頭で述べたように、それらは①中華民国の台湾化における金門の政治的重要性の矛盾、②金門アイデンティティにおける世代間の分裂、③台湾社会の歴史認識における金門の存在価値の希薄化にまとめることができる。

それらの点を論じる前に、台湾化が進むここ四半世紀ほどの政治的変化をもう少し説明しておきたい。1996年に直接選挙で李登輝が大統領に選出されると、『認識台湾（台湾を知ろう）』という教科書²⁸が使用される。中華民国ではなく、台湾を基盤に国家とは何かを考えることが広く支持されていくようになる。また、「台湾と中国は特殊な国と国の関係」という二国論を李登輝は唱えた。ただ、彼の考えは、実は金門や連江を排除するものではなかった。

中華民国の台湾化は陳水扁大統領時代にさらに強化される。民進党の陳水扁は中華民国ではなく、「台湾」という名前で国連加盟を行おうとし、「正名運動」も行い、「中華」という文字を「台湾」へと変えていった。脱中華民国化で、中華民国の台湾化を強く推進した。

2008年から2016年まで大統領を務めたのが国民党の馬英九である。馬英九は中華民国の台湾化へ反対し、中国との安定した関係を築くことにまい進する。また、「一中原則（ひとつの中国）」を兩岸関係の基盤とし、中国との直行便を実現し、ECFAという自由貿易協定の交渉を進め、中華民国統治地域と中国との経済的結びつき（実際には台湾の中国への依存）が急速に進む。中国からの観光客も急激に増え、2008年は約40万人だったが、2015年には約10倍の400万人強となった。馬英九の政策は、中国の思いとも合致し、政治的にも経済的にも中国と台湾社会の一体感を醸成しようというものであった。

この流れが大きく変化するのが蔡英文の当選である。民進党の蔡英文は

2016年1月の大統領選挙に勝利し、同時に立法委員においても民進党や時代力量(ニューパワー)の、馬英九の政策に反対する政党が過半数を占めた。立法院(日本の国会に相当)を民進党らが過半数を占めることは、中華民国の政治上初めてのことであった。2016年5月に就任した蔡英文は、「一中原則」を認めず、中華民国ではなく台湾社会を基盤に政策を考える立場にある。蔡英文就任後、台湾社会と中国の関係は急速に冷め、中国が様々な形で台湾社会へ圧力をかけている²⁹。

蔡英文の当選の背景には、行き過ぎた、かつ急速な台湾社会の中国への経済的依存があった。過度な依存は台湾の自主性を損なうものと判断された。さらに「天然独」と言われる、生まれながらにして台湾社会という国家体制が当たり前という若年層の存在である。20歳代以下を中心に李登輝や陳水扁がつくった教育を受けた人々は、既述したように中華民国も台湾社会も同じという認識が強い。彼らは台湾社会の主権を脅かすような馬英九や国民党の政策に賛同することはできず、蔡英文の当選や民進党の躍進に寄与した³⁰。

これらの政治的变化の中で、金門の前校長等やその世代は、馬英九の政策を強く支持し、中華民国の台湾化に反対した。その一方で昔からの台湾独立派は中華民国という国体を想起させる福建省金門の存在は台湾独立には無用と考えた。そして、天然独と言われる世代は、中華民国と台湾との違いが感覚上融解し、「金門も台湾だ」というように金門は特別な意味(その歴史や地政学的意味)を持たない場とされていった。

これらの政治的動向、世代間の認識の違いは、金門が台湾社会でいかなる意味を持つかが重要な課題になっていることを示している。ある者にとって金門は中華民国という体制、または「一中原則」の象徴とされ、中華民国の台湾化に抗する存在となる。それ故に台湾独立派は金門等の中華民国の福建省を必要とせず、台湾独立には不要な存在となる。いずれにとっても金門の位置づけは重要であるが、矛盾した意味を持つ。これが、中華民国の台湾化における金門の政治的重要性の矛盾である。

二つ目の課題だが、第三節で紹介してきたように金門アイデンティティは中華民国の台湾化において世代によって異なるものを生み出している。中華民国という体制を信じ、金門の軍事化に耐えてきた世代にとって、金門は中

華民国という体制を守るために犠牲になった場所であり、現在の台湾社会の繁栄を支えた場であった。その犠牲と貢献が忘却されて、金門が台湾社会とされるのは受け入れられるものではなかった。金門は中華民国が中華民国であるためにも台湾社会とは別のものとして存在しなければならなかった。

だが、台湾化した教育を受けた天然独の世代、さらにメディアやネットによって台湾島と変わらない文化を享受している世代にとって、金門と台湾島を分けることの意義は見えにくいものであった。

沼崎は台湾社会の経済発展によって台湾島全体が 1980 年代以降、ひとつの生活世界となる「台湾大の台湾」が生まれたことを指摘する(沼崎 2002)。その点で言えば、1992 年に金門の戒厳令が解除され、台湾島との自由な往来が確保され、1990 年代後半には『認識台湾』等の教科書が生み出されていく。さらにメディアやネットの発展は約 270 キロの物理的距離が意味をなさないものとなった。台湾大の生活世界は台湾島のみならず、金門も含むものになっていったと言えよう。金門も含めた台湾大の生活世界の存在が「金門も台湾(社会)だ」という認識を生み出したこともうなずける。これが金門アイデンティティにおける世代間の分裂である。

最後の課題だが、中華民国の台湾化は、本稿で紹介したように筆者に尋ねられて意識するように、若年層において金門の存在が軽視される傾向があった。歴史として「823 砲戦」を知り、金門と言えれば戦争という認識はあるが、それが現在の国家のありようにどう関係しているかまでは、思い至らない。それ故に天然独世代が今後増えることを考えれば、彼らにとっての台湾社会における歴史認識において金門の存在価値の希薄化は避けられない。

希薄化には、戦争を体験し、生活が軍事目的のために制限された経験を持つ世代と、そのような人々以外の世代との記憶のあり方も関係している。軍人に頼ることができない金門経済では観光産業が重要なものとなり、戦争遺跡も観光スポットになっている。だが、筆者を案内したタクシー運転手 O 氏が語るように、「当時の生活は観光化された施設だけではよくわからない」のである。中国人民解放軍の攻撃に日々脅え、生活が制限された経験は、体験者以外には伝わっておらず、あきらめの声も存在する。経験者にとって「生きられた歴史(アルヴァックス 1989)」であり、彼ら以外の者にとっては単

に文字に書かれたものに過ぎない。ましてや台湾島に住み、金門の存在を日常生活では忘れて台湾社会を認識する世代には一層想像がつかない。ここに台湾社会における歴史認識における金門の存在価値の希薄化が見出される。

蔡英文大統領のもと今後進むと思われる中華民国の台湾化は、金門の国家における立ち位置を今後一層曖昧にするものであり、矛盾を深めるものである。それ故に本稿で指摘した3つの課題は、金門研究としても台湾社会研究としても検討すべき重要な課題である。特に本稿では30歳代の資料がなく、今回の調査から考えるにその世代が中華民国や台湾社会、さらには金門への認識をめぐる転換期ではないかと推測され、筆者の今後の課題である。

謝辞

本稿の主資料は、JSPS科研費21320072、JSPS科研費22251012、JSPS科研費25283015の支援に基づいて収集しました。調査にあたっては調査地で多くの方々から協力いただきました。感謝申し上げます。

-
- 1 金門の人によれば、金門籍の人には様々な優遇政策があり、その恩恵を受けるために実際の生活の拠点が台湾島でも戸籍を移さないという。
 - 2 中華人民共和国政府、中華民国政府ともに相手を国家として承認していないことは周知のとおりである。したがって台湾問題は国際問題ではなく、国内問題とともに当時理解していた。
 - 3 軍事化した金門の暮らしについては、マイケル・スゾーニ（2011）に詳しい。
 - 4 中華民国統治地域と中国が直接的に往来できるようになったのは、2008年である。三通とは、「通商」、「通航」、「通郵」の3つである。
 - 5 金門は華僑の故郷「僑郷」ともされる。日本、東南アジア等に多くが移り住んだ。
 - 6 正名運動は陳水扁大統領時代に強く推進され、中華郵政が台湾郵政へと変えられたりした。
 - 7 中国語では「総統」だが、日本語の「総統」には独裁的意味合いがある。直接選挙で民主的に選ばれたことに鑑みれば、大統領という用語が日本語としては適切あり、本稿では「総統」の訳語として「大統領」を用いる。

⁸ 本稿の金門在住の人々に関する資料は、2012年から2014年の間に5回にわたり行った現地調査に基づくものである。1回につき4泊5日から2泊3日で調査を実施した。2013年3月に金門からアモイにフェリーで渡り、アモイに1泊し、金門に戻った。

⁹ これを「凍省」といい、台湾省も同様に「凍省」されている。

¹⁰ 三尾は日本の植民地支配の特色として文明との関係をもう一点あげる。西洋列強の場合、「文明化の使命」があったとするが、日本の場合、台湾にしる、韓国にしる、旧南洋群島にしる、すでに中華文明なり、西洋の文明が存在しており、その支配は、西洋列強のように「文明化の使命」というものではなかった（三尾 2016）。

¹¹ 光が再び戻ったということで、日本の植民地支配から解放されたことを台湾で「光復」と称す。だが、この呼称については、国民党の独裁によってふたたび台湾の人々にとって暗黒の日々となったということで反対する者もいる。

¹² 台湾の日本への複雑な感情の形成を国民党の独裁との関連からいち早く指摘した一人に、台湾人意識を歴史的に研究する何義麟がいる（2000、2003）。

¹³ 中華民国では、中華人民共和国を「中国」と称すると中華民国とは別にもうひとつの中国という国家があることになるため、「一中（ひとつの中国）」原則から「大陸」と言い慣わしてきた。

¹⁴ 8 2 3 砲戦は、1959年8月23日から10月5日の間中国人民解放军が行った砲撃に対して、中華民国国軍が金門を守った戦い。

¹⁵ その成果は上水流（2012）に詳しい。

¹⁶ このような声が中華民国の台湾化において聞こえにくいのも事実である。

¹⁷ 文化人類学的調査に基づき、広範囲なアンケートではなく、知人の紹介等一定程度の信頼がある中でインタビュー先を確保する手法を基本的にとった。古蹟の説明者・居住者の多くはそこで出会った人物である。これらの手法の他、金門県政府文化局にインタビューを申し込み、そこから関係者を紹介してもらった。また古蹟調査で出会った人々、タクシー運転手からの紹介等を通じてインタビューを実施した。

¹⁸ 台北には故宮博物院があり、中国本土にも紫禁城を始め兵馬俑、長城等中華文明を語るものは実際には多く存在する。だが、それでも台湾島は西洋化されているのであり、中国本土は共産党によって伝統が破壊されていると語られる点に金門の人々の自己認識の拠り所が見られる。

¹⁹ ただし、説明者の全てが40歳以上の人々ではあった。

20 金門では、1949年以前、アモイとの結びつきは強く、日常的に買い物へ行き、様々な物資がアモイから入ってきていた。1949年の突然の断絶はたまたまアモイへ金門から買い物に行った家族や親族と引き離すもので、とても悲惨なものであったという。

21 2002年以前にも戒厳令が解除されて以降、密貿易のようなものはあったようである。筆者は1995年に台湾の研究者と金門を訪問したが、レストランで食べている魚について現地の政府関係者は海に浮かぶ漁船を指さして「あの大陸の船が釣った魚がこれですよ」と冗談のように語っていた。

22 歴史建築は古蹟に比べるとその価値がやや劣るもので、金門では金門出身で成功した華僑が建てた西洋建築物の多くがその認定を受けていた。

23 民進党の知人にこの話をしたところ大変驚いていた。彼はそのような動きを知らなかった。

24 この点について金門大学の教員も同意していた。金門アイデンティティを論文にしたらという筆者の問いに、一人の教員は「他地域から来て金門で働く人間にそれはできません」と語った。現地で金門のアイデンティティを論じるとはとても微妙な問題であるということであった。本稿が、個人が特定される氏名や居住する、説明をする古蹟を明らかにしない理由も人類学的倫理によるものの、このような現地の認識も大きい。

25 台湾島在住の金門出身者へのインタビューは2015年から開始した。別表にあるように5名で、今後も引き続き聞き取り調査を行っていく予定である。

26 実際は「台湾」と表現していた。

27 ただし、金門の40歳代以上と同様に金門にいる時台湾島に行くことを「台湾に行く」と使っていた。

28 1997年から2002年まで中学校で使用された教科書で、台湾で初めて台湾を知るための教科書となった。歴史篇、地理編、社会篇の3冊があった。

29 台湾への中国からの団体観光客は4割程度減っている。また様々な国際機関において台湾の参加を阻む行為を行っている。

30 天然独を中心に時代力量が議席を確保した。

参考文献

- アルヴァックス M. 1989 『集合的記憶』、行路社、東京。
- 黄振良 2008 『金門古蹟導覽』、金門県文化局、台湾：金門県。
- 何義麟 2000 「『日台親和』の虚像と実像—植民地支配の歴史経験は国際協力のモデルか?」『インパクション』120：93-98 頁
- 2003 『二・二八事件 「台湾人」形成のエスノポリティクス』、東京大学出版会、東京。
- 上水流久彦 2007 「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」『アジア社会文化研究』5、pp.84-109。
- 2012 「台湾の本土化後にみる外省人意識」沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』、pp.139-174、アジア経済研究所、東京。
- 2016 「台湾の植民地経験の多相化に関する脱植民主義的研究—台湾の植民地期建築物を事例に—」三尾裕子・植野弘子・遠藤央編『帝国日本の記憶 台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』、pp.261-288、慶應義塾大学出版会、東京。
- 上水流久彦・中村八重 2007 「東アジアの政治的变化にみる越境—台湾の韓国華僑にとっての中華民国」『広島県立大学論集』11-1、pp.61-72。
- 川島真 2011 「地域研究の対象としての金門島」地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会『地域研究』11-1、pp.7-19、昭和堂、京都。
- 黄智慧 2003 「ポストコロニアル都市の悲情—台北の日本語文芸活動について」大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学教室編『アジア都市文学の可能性』、pp.115-146 清文堂
- 沼崎一郎 2002 「現実の共同体、架空の共同体：台湾社会の変容と「新しい台湾意識」の出現」『東北人類学論壇』1、pp.19-29。
- マイケル・スズーニ（福田円訳・太田雄三監訳） 2011 「軍事化・記憶・金門社会—1949～1992年」地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会『地域研究』11-1、pp.62-87、昭和堂、京都。
- 三尾裕子 2016 「台湾と旧南洋群島におけるポストコロニアルな歴史人類学

の可能性—重層する外来政権のもとでの脱植民地化と歴史認識—」
三尾裕子・植野弘子・遠藤央編『帝国日本の記憶 台湾・旧南洋
群島における外来政権の重層化と脱植民地化』、pp.1-30、慶應義
塾大学出版会、東京。